

AI は万能じゃないのね。

【物語編】

■学食

佳乃、春菜、亮がスマホでバイト（一般事務バイト）を検索している。

亮「ふーん、なるほどね。」

亮、佳乃と春菜にスマホを見せつつ。

亮「ほら、このバイト情報サイト、結構あるよ。どれにしようかな。」

春菜「あれ？私も同じサイト見てるけど、あんまり出てこないよ〜。」

佳乃「私も同じサイトだけど・・・亮みたいにかくさん出てこないわね・・・入力した情報は同じようなものよね？？年齢とか場所とか・・・」

亮「あれ、そうなの？こっちは結構選べるよ。」

佳乃、怪訝な表情になる。

佳乃「なんでだろう？ちょっと調べてみる。」

佳乃、タブレットで調べ始める。春菜と亮は引き続きスマホでバイト探し。

佳乃「そういうことね。」

春菜「何か分かったの？」

佳乃「私たちが見ていたバイト情報サイトって、AIが判断してその人にあった情報を提示するようになってるみたい。」

亮「ほお、すごいじゃん。最先端だねえ。でも、AIがなんで関係あるの？」

佳乃「登録した情報に大差はなかったのに、私と春菜は出てくる情報が少なくて、亮は多かったわよね。でも、明確に違うところがあるでしょ？」

亮、ハツとして。

亮「あ、性別！？」

佳乃「そう。私と春菜は、名前から女性と推定されて、結果として弾かれているんじゃないかな。これって、いわゆるジェンダー差別よね。性別によって受け取る情報に差が出るようになってるんだもん。」

春菜「えー、そんなの許せない。今って、性別で差別しちゃいけないでしょ？おかしいじゃん。」

佳乃「うん、性別で分けちゃいけないのに、このサイトのAIが勝手にやっちゃってるんだらうね。就活のサイトなんかでも同じような例があるみたいよ。」

亮「そういうことか。せっかく最先端の技術を使っているけど、運用がうまくいってないなら宝の持ち腐れだな。」

春菜「AIって、すごく賢いイメージがあるけど、万能じゃないのねえ〜。」

■ 春菜の部屋

春菜、ベッドに座り、スマホでチャットボットをしている。

春菜「今日は疲れたな〜。こんな時はチャットボットちゃんに癒してもらいましょっか♪」

ここからスマホ画面でのやりとり。

春菜：こんにちは〜。

ボット：こんにちは、春菜さん。どうしました？

春菜：授業が難しくて、疲れちゃった。癒しが欲しい〜。

ボット：それは大変でしたね。疲れた時の癒しには美味しいものを食べたらいいですよ。

春菜：それ、いいね。美味しいもの食べたい〜。

ボット：春菜さんは何が好きですか？

春菜、少し考えて。

春菜「好きなもの・・・たくさんあるな〜。適当に書いておこう。」

再びスマホ上のやりとり。

春菜：カニカマの上に目玉焼きを乗せた、「メダカ」っていうメニューが好きだよ。

ボット：目玉焼きが好きなんて、変わってますね。

春菜：そうかな？なんで変わってるの？

ボット：目玉焼きが好きな人は将来の年収が低いんです。

春菜、当惑して。

春菜「え？なに言ってるの??」

春菜がスマホで四苦八苦している。

途中でひとこと。

春菜「なんか、チャットボットが差別的になってきたぞ（泣）」

再び四苦八苦。

しばらくして画面を表示。

ボット：春菜さん、もっとしっかり考えた方が良いですね。

春菜：ちゃんと考えてるよ！

ボット：このままだと春菜さんは不幸になりますよ。

春菜、驚いて。

春菜「えー！なんでこんなこと言われるの～（泣）」

【解説編】

■春菜の部屋

天の声「春菜さん、散々な言われようですね。」

春菜「はい。チャットボットに癒されようと思ったのに、逆に不愉快になっちゃいました。なんで途中からおかしなやりとりになっちゃったんだろう？」

天の声「それは、チャットボットがAIを活用しているということを理解する必要があります。」

春菜「さすが、AI。普通に会話してるみたいに返信がくるから、人間がやってるのと変わらないですね。」

天の声「昨今はビッグデータの活用ということが言われており、様々なものにAI、人工知能が使われています。AIは、入力されたデータを学習する機能を持っています。つまり、インプットする情報量が多ければ多いほど、様々な事柄に対する知見が積み重なっていき、よりよい判断をすることが可能になるのです。」

春菜「そうなんですね！AIって無条件ですごいという印象を持っていました。」

天の声「その、無条件ですごい、というイメージが落とし穴なのです。」

春菜「どういうことですか？」

天の声「AIに学習させる情報のことを「教師データ」と言います。春菜さんは今まで学校や家で様々なことを学んできたと思いますが、健全に成長できたのは、それらを教えてくれた人、教師役の人たちからちゃんとした情報を受け取ってきたからです。では、この教師が悪人だったらどうでしょうか？」

春菜「それは・・・グレしたり、泥棒したりしたかも・・・」

天の声「その可能性がありますよね。これはAIにも言えることです。つまり、インプットする情報がそもそも間違っていたり、差別的であった場合、教えられたAIはその中から答えを導き出すので、必然的にアウトプットもそのようになります。」

春菜「そっか、ということは、私がやっていたチャットボットを利用しているたくさんの人の中に、そういう人がいたから、おかしなやりとりになっちゃったってこと？」

天の声「そういう人が、きっと、たくさんいたのでしょう。他にも、こんな例があります。とある就活サイトの運用会社が、学生の内定辞退情報をAIで分析し、その予測情報を企業に売っていたというものです。その時は、学生に許諾をとっていませんでした。

AIによって膨大な情報を解析し、予測できるようになったということは良いのですが、AIによってそういうことができるようになったからこそ生まれた弊害です。倫理観が欠如していますし、法的にも問題があります。」

春菜「ますます信じられなくなってきました・・・」

天の声「春菜さんたちが使っていたバイト情報サイトにも触れておきましょう。」

春菜「私のは亮と比べて、提示されたバイトの数が明らかに少なかったです。」

天の声「はい。あのサイトでAIが提示した情報は、それまでのバイトの応募者のデータを解析した結果ですので、必ずしも間違っているわけではありません。問題は運用をAIに頼っていたため、運営会社側のチェック機能が働いていませんでした。その結果、ジェンダー差別、つまり性別による差別が生じてしまいました。しっかりチェックしてサイトを作っていれば、あのようにならなかったはずです。」

春菜「はい。AIって万能ではないんだなあと感じました。」

天の声「そうですね。これらのことから分かるのは、AIはあくまでもツールであり、活用するのは人間だということです。新しい技術を利用して何かを作ろうとする人たちには、常に倫理的・法的・社会的な課題を意識することが求められます。これらは、「ELSI」（エルシー）と呼ばれ、Ethical（倫理的）、Legal（法的）、Social（社会的）、Issues（問題）の頭文字をとったものです。このエルシーをしっかりと考えて判断して作られたサイトかどうかを、確認する事が大事です。」

春菜「あのときのバイト情報サイトも、さっきのチャットボットも、どっちも、エルシーができてなかったんですね。でも、これから、エルシーを考えたサイトが増えるといいですね。」

天の声「そうですね。エルシーを考えていない人工知能の利用は、きっと、うまくいかなくなって、今後の社会も発展しないでしょう。」

春菜「分かりました。これからの期待します。」